Sa iki jou ka machi i seki

佐伯城下町遺跡

西田病院駐車場地点

病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

大分県
佐伯市教育委員会

序　文

大分県南部に位置する佐伯市は、近世毛利藩２万石の城下町が基礎となって発展した都市です。今回の発掘調査は城下町遺跡内での病院施設建設に伴い実施したもので、２度に渡る調査の結果多数の近世陶磁器類、土器類などと共に建物基礎とみられる石組遺構などが出土しました。調査地点は残存している絵図などから上級武士であった小林家の屋敷が存在した場所にあたり、出土遺構は当時の武家屋敷に関連するものと考えられます。佐伯市内では天祐館遺跡に次ぐ本格的な城下町の調査であり、非常に貴重な資料を得ることができました。

ここに調査の詳細を記した発掘調査報告書を刊行することができました。本書が、ひろく市民の皆様に郷土の歴史に興味をもっていただくきっかけになると共に、近世考古学の調査・研究に寄与できれば幸いです。

最後に、本調査を実施するに当たり多大なご協力をいただきました医療法人慈恵会西田病院をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成12年３月

佐伯市教育委員会　教育長　森 脇 一 郎

例　言

1．本書は平成10年度（1998）に発掘調査を実施した西田病院増築工事に伴う佐伯城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本調査地点は佐伯市大手町３丁目132番２に所在する。
3．発掘調査は医療法人慈恵会西田病院の委託を受けて、佐伯市教育委員会が主体となり平成10年５月14日から20日までと平成11年３月11日から31日まで実施した。
4．発掘調査、報告書の費用はすべて医療法人慈恵会西田病院が負担した。
5．調査は佐伯市教育委員会社会教育課文化係の吉武牧子が担当した。
6．出土遺物の整理作業は渡辺　薫（佐伯市教育委員会臨時職員）が行い、遺物実測、図版作成、浄書、写真撮影は吉武が行った。
7．遺物の墨書及び一部銘の解読については長谷定子（佐伯市教育委員会臨時職員）の協力を得た。
8．本書の執筆、編集は吉武が行った。

目　次

Ⅰ．調査の経緯と調査地点の歴史的背景 …… 1
Ⅱ．調査の成果 …… 2
　Ａ　区 …… 2
　Ｂ　区 …… 3
Ⅲ．まとめ …… 18

Ⅰ．調査の経緯と調査地点の歴史的背景

1998年４月、佐伯市教育委員会は医療法人慈恵会西田病院より佐伯市大手町で病院施設を増築するという連絡を受けた。建設予定地は佐伯城下町遺跡の範囲内にある西田病院駐車場である。工事は駐車場の一画にリハビリ棟を建てるというもので、建築面積はは57.95m²であった。基礎工事のため１m程掘削するということから、市教委では遺構の有無を確認するための試掘調査を行った。その結果建物基礎と考えられる石列遺構が出土したため、病院側と協議を行い本調査を実施することとなった。調査期間は1998年５月14～20日、調査面積は21.3m²である。その後平成11年１月に再び西田病院より、前回の調査地点の隣接地に病院施設を建てるという知らせがあった。これを受けて試掘調査を行った結果、石組遺構が出土したため本調査に移行した。工事の範囲は193.5m²であったが病院職員の駐輪場と排土置き場確保のため、試掘時の遺構の出土状況を考慮し、実際の発掘面積は約59m²となった。調査は1999年３月３日～31日まで実施した。以後、1998年５月の調査範囲をＡ区、1999年３月の調査範囲をＢ区と呼ぶことにする。

さて、近世の佐伯は毛利藩２万石の城下町が築かれた地である。調査地点は堀を挟んで佐伯城に対面する上級武家屋敷の並ぶ一画に位置する。絵図の屋敷割と比較すると、元文３年（1738）の「御城並御城下絵図」では小林九左衛門、文政９年（1826）の「御城下分見明細図絵」では小林七郎左衛門、明治４年（1872）頃の「佐伯藩時代屋敷図」では小林隆吉の敷地に対応しており、江戸中期からは一貫して小林家の住居であったことが分かる。ちなみに小林家西隣は絵図の各時期とも一貫して佐久間家屋敷であるのに対し、東隣は黒木（元文３年）→西名（文政９年）→間（明治４年頃）と居住者が変わっている。小林九左衛門は６代藩主毛利高慶によって登用され、宝永５年（1708）に新知行80石を拝領して給人格となる。翌年には城普請の経理責任者に任ぜられたが、正徳元年（1711）職務に不審な点があるとして一族諸とも城下から追放された。その後享保３年（1718）赦されて復職し仕置用人に登用されるが、翌７年に死去した。子の典善は享保11年（1726）家老にまで進んでいる。年代的にみて、元文３年の絵図にある「小林九左衛門」とは典善のことかあるいはその子である可能性が高い。

参考文献　佐伯市教育委員会『佐伯藩史料　温故知新録三』1999
佐伯市教育委員会『佐伯市史』1974

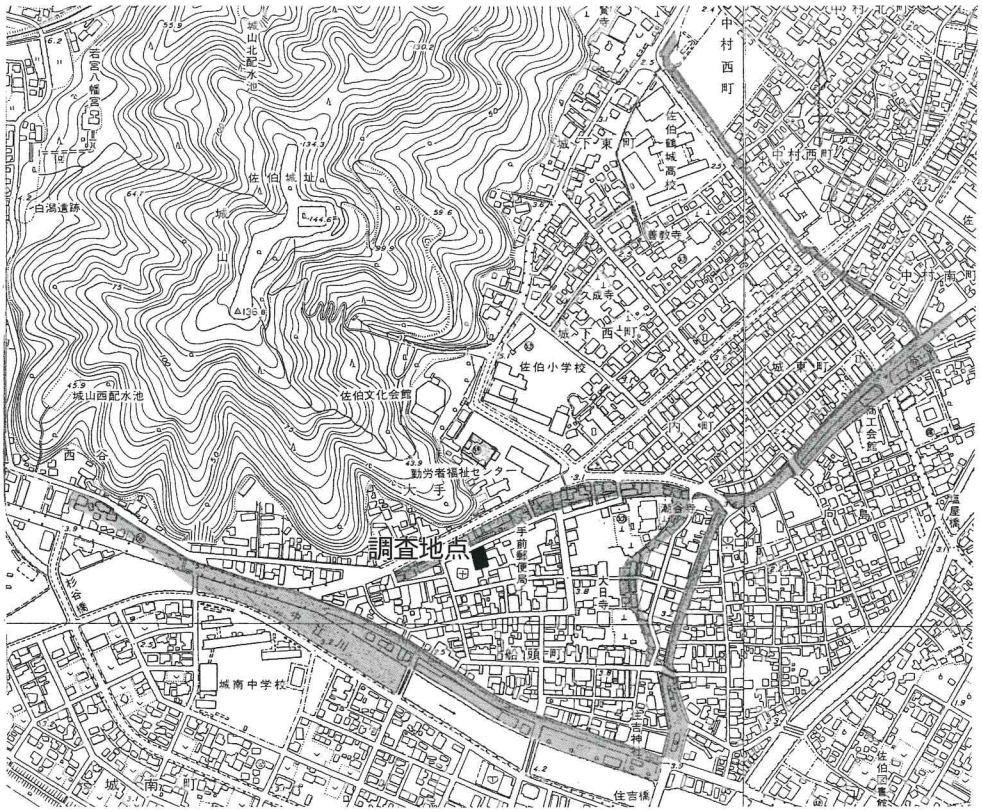


図１　佐伯城下町遺跡と調査地点（Ｓ＝1：10000）
アミカケ部分が堀で城下町の範囲はその内側

Ⅱ．調査の成果

A　区

A区は2.5×8.5mの略長方形で、面積は約21.3m²とごく狭小であった。調査は重機で舗装部分を剥ぎ取った後慎重に掘り下げを行い、地表面から約30cm下の遺構上面に達したところで人力による掘削に切り替えた。遺構は建物礎石と考えられる石列遺構と埋甕１基が、調査区の東側部分より出土した。調査区西側は火災で焼失した住居を廃棄したと考えられる土坑によって撹乱されている。撹乱坑からは昭和以降の陶磁器類やガラス製の醤油差しなどが出土した。その撹乱坑に沿って凝灰岩切石を三枚並べた遺構が出土したが、両者の関係については不明である。中央部からは遺構は出土しなかったが、明治期のものを含む遺物が出土している。

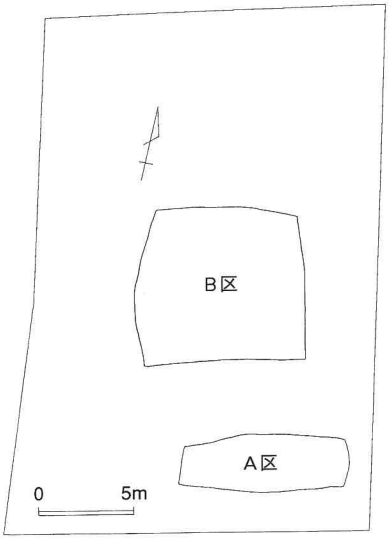


図２　調査区位置図（Ｓ＝1／400）

(1) 石列遺構

石列遺構には南北方向に並ぶ１号石列と東西方向に平行に並ぶ２、３号石列があり、２、３号は１号に垂直に接し東の方向に伸びる。検出長は１号石列が2.6m、２号石列が3.1m、３号石列が1.2mを測り、１、２号はさらに調査区外へ伸びる。構造的には１号と２号は比較的均質な大きさの石を上面が平坦になるよう配置しているが、３号は小さい礫を２列に並べて使用するといった相違点がみられる。３号の検出長が短いことについては、調査区南東隅の幅1.5m，長さ2.0mの範囲を重機で掘削した時に壊してしまった可能性もある。遺構検出面で出土した遺物の年代から明治期の建物であると推定される。

(2) 埋甕

３号石列に接するように埋設されている。上半分、底部は欠失しており、体部下半分の一部が辛うじて残っていた。陶器の甕で出土状況から上記建物に伴う便槽として設置されたものと考えられる。甕の年代、産地は不明である。

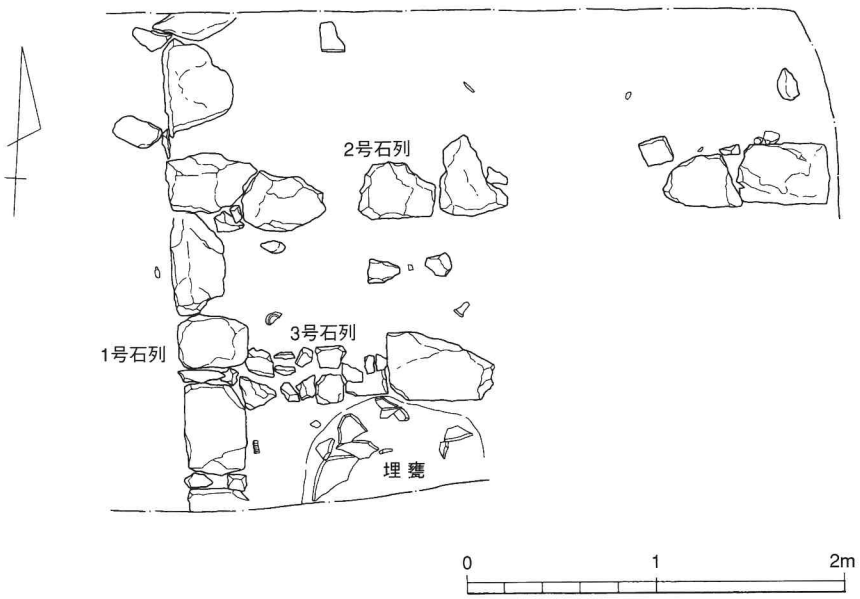


図３　Ａ区遺構配置図（Ｓ＝1／40）

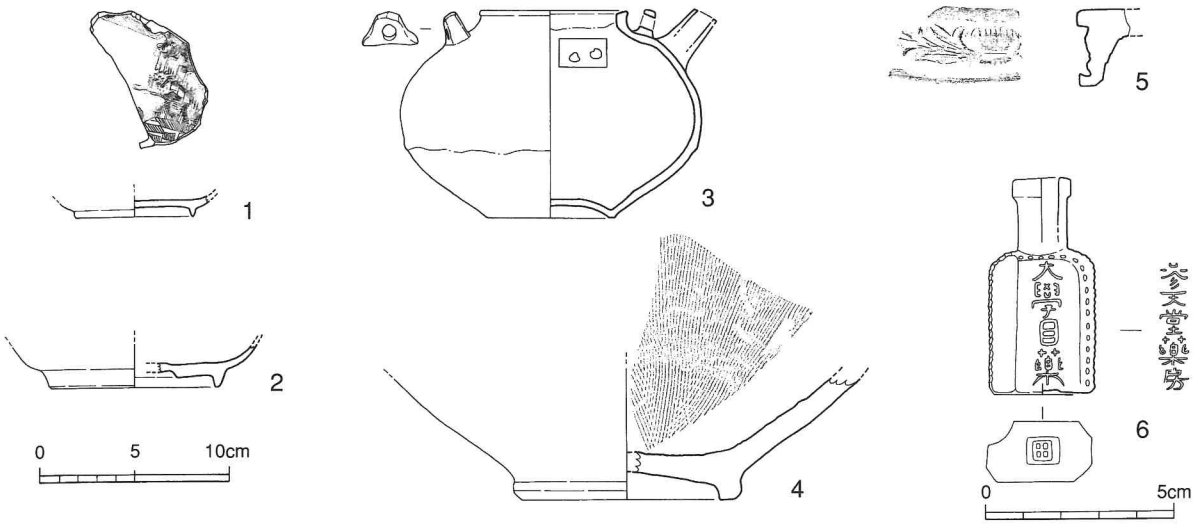


図４　Ａ区出土遺物（１～５はＳ＝1／4、６はＳ＝1／2）

(3) 出土遺物

図４－１は肥前染付磁器皿で内面に楼閣山水文を描く。年代は18世紀後半～19世紀前半である。２は肥前白磁輪花皿で底部は蛇ノ目凹形高台となる。年代は18世紀末～19世紀前半。３は陶器土瓶で上半部に緑釉が掛けられている。肥前産または関西産で19世紀前半の所産である。４は明治以降の製品と推定される産地不明の陶器擂鉢である。５は軒平瓦。瓦当文様は均整唐草文で、中心飾りが花卉状文、唐草の部分は線彫りの葉文で表現されている。19世紀以降のものである。６はガラス製の目薬容器で、前面に「大學目藥」、裏面に「參天堂藥房」、底部に「田」という陽刻がある。「参天堂薬房」とは明治23年に田口洋吉が大阪に開いた「田口参天堂」のことで、大正10年の広告では「参天堂合資会社」となっている。現在の名称は参天製薬株式会社である。底部の「田」は創業者田口洋吉の田であろう。「大学目薬」は明治30年（1897）に発売され、巧みな宣伝によって大ヒット商品となった。このタイプの容器は昭和６年に新しい容器に代わるまで使用されていた[1]。

Ｂ　区

Ｂ区は7.7×7.7ｍの略方形で、面積は約59m²である。調査はＡ区同様重機で舗装部分と表土を除去した後慎重に掘り下げ、近世陶磁器類が出土する層に達した段階で作業員を投入して遺構検出作業を行った。時間的な制約から遺物は遺構出土のもの以外、層ごとに一括して取り上げを行っていった。遺構は石組遺構５基、コの字状に廻る石列遺構１基、瓦溜１基、土坑１基である。石組遺構、瓦溜、土坑は地表から約100cm掘り下げたところで検出したが、コの字状石列遺構はそれらより50cm程高い地点で出土している。遺構はほぼ調査区南半分に集中しており、北側では出土していない。調査区北側は部分的に撹乱されており、特に北東隅は大きく撹乱を受けていた。このことが遺構が出土しない原因とも考えられる。

遺構を完掘した段階で調査区南壁の土層の観察を行った。１層はアスファルト舗装とその下の砂利層である。２・３層は現代の造成土で、コンクリート基礎が埋め込まれており一部は４層まで達している。４層からは近世の遺物も多く出土したが明治期の遺物も含むことから近代の整地層と考えられる。５層は遺構検出層であり、17世紀初頭～18世紀後半の遺物が出土している。その中で主体を占めるのは18世紀後半のものであることから、５層は18世紀後半に形成された整地層であり、５層上面は18世紀後半～幕末にかけての生活面であったと推定できる。６層は砂層（地山）である。佐伯の城下町はほとんどが初代毛利高政入部後の埋め立てによって築かれており、６層自体は近世以前の干潟であると考えられる。今回６層遺物として取り上げたものは、大きく分けて調査区南西角部の遺物集中部と北東角部トレンチ内の２カ所から出土したものである。遺物の年代について、両者とも19世紀前半まで下るものを含み５層よりやや新しい様相を呈する。このことは遺物集中部としたものが５層上面から掘り込まれたゴミ穴であった可能性を示している。一方後者についてはトレンチが撹乱部分と接しているため流れ込みである可能性が高い。

(1) 石組遺構

１～４号はほぼ等間隔に方形に配置されており、５号も１、２号と同一ライン上に並んでいる。１、２、５号石組は拳大から人頭大の礫を中心に構成されているが、３号は長さ30cm程度のやや大きいものも含む。これに対して４号は小礫と瓦片で構成されている。石組は１・５号以外ややまとまりを欠くものの、配置から推定すると礎石下の根固め石として埋設されたものと考えられる。出土遺物は５層同様18世紀後半のものが大半を占めることから、５層造成時以降に建設された建物の基礎であると考えられる。

(2) １号石列

調査区の西端に位置する。平面形態は30～40cm前後の礫をコの字状に配し、内部はやや残りは悪いものの礫によって３つに区切られていた様子である。遺構はさらに調査区西側へと続くため全体の形状は明らかではない。また石列北角部は撹乱により礫が抜き取られている。石列のレベルは他の石組遺構や瓦溜などより50cm程高く、５層上面で検出されている。遺構の南隅には円形に焼土が検出された。遺物の時期から遺構の年代は18世紀後半と推定される。

(3) １号瓦溜

２、３号石組の同一線上にほぼ同じ間隔で配置されている。平瓦を敷き詰めたような状態で所々に陶磁器類も混じっていた。遺構の性格は瓦を廃棄したゴミ捨場と考えるのが一般的であるが、出土位置からみると根固め石と同様建物基礎である可能性も残る。時期は18世紀後半以降に比定される。

(4) １号土坑

陶磁器、土師質土器、貝類、獣骨などが出土しており、廃棄のためのゴミ穴と考えられる。貝の種類はアカニシ、ハマグリ、アワビ等である。出土遺物から18世紀末～19世紀前半に形成された遺構である。

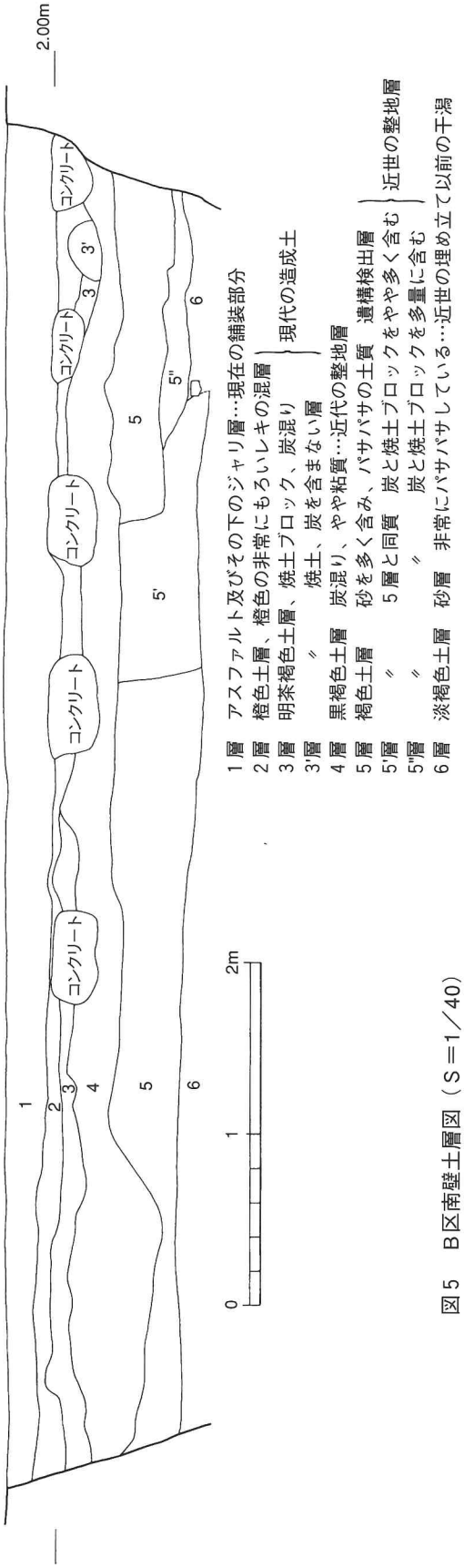


図５　Ｂ区南壁土層図（Ｓ＝１／40）

石組遺構

～4号はほぼ等間隔に方形に配置されており、5号も
2号と同一ライン上に並んでいる。1、2、5号石組
にから人頭大の礫を中心に構成されているが、3号は
0cm程度のやや大きいものも含む。これに対して4
ん礫と瓦片で構成されている。石組は1・5号以外や
こまりを欠くものの、配置から推定すると礎石下の根
石として埋設されたものと考えられる。出土遺物は5
後18世紀後半のものが大半を占めることから、5層造
以降に建設された建物の基礎であると考えられる。

号石列

区の西端に位置する。平面形態は30～40cm前後の
Uの字状に配し、内部はやや残りは悪いものの礫によ
つつに区切られていた様子である。遺構はさらに調査
側へと続くため全体の形状は明らかではない。また石
内部は攪乱により礫が抜き取られている。石列のレベ
他の石組遺構や瓦溜などより50cm程高く、5層上面
されている。遺構の南隅には円形に焼土が検出され
遺物の時期から遺構の年代は18世紀後半と推定され

号瓦溜

3号石組の同一線上にほぼ同じ間隔で配置されてい
瓦を敷き詰めたような状態で所々に陶磁器類も混じ
た。遺構の性格は瓦を廃棄したゴミ捨場と考えるの
的であるが、出土位置からみると根固め石と同様建
である可能性も残る。時期は18世紀後半以降に比定
。

号土坑

器、土師質土器、貝類、獣骨などが出土しており、
ためのゴミ穴と考えられる。貝の種類はアカニシ、
リ、アワビ等である。出土遺物から18世紀末～19世
に形成された遺構である。

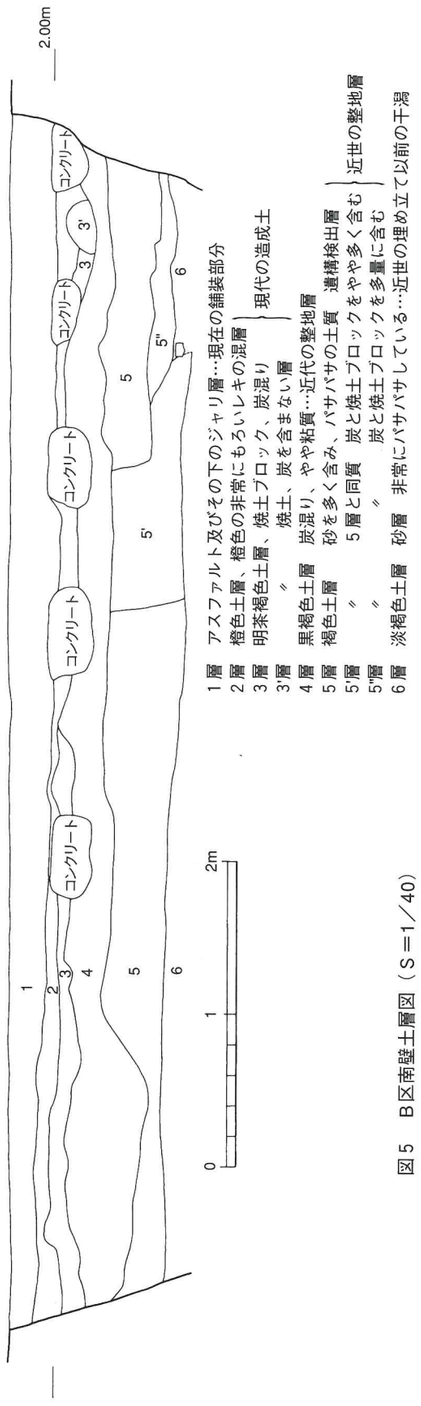


図5　B区南壁土層図（S＝1／40）

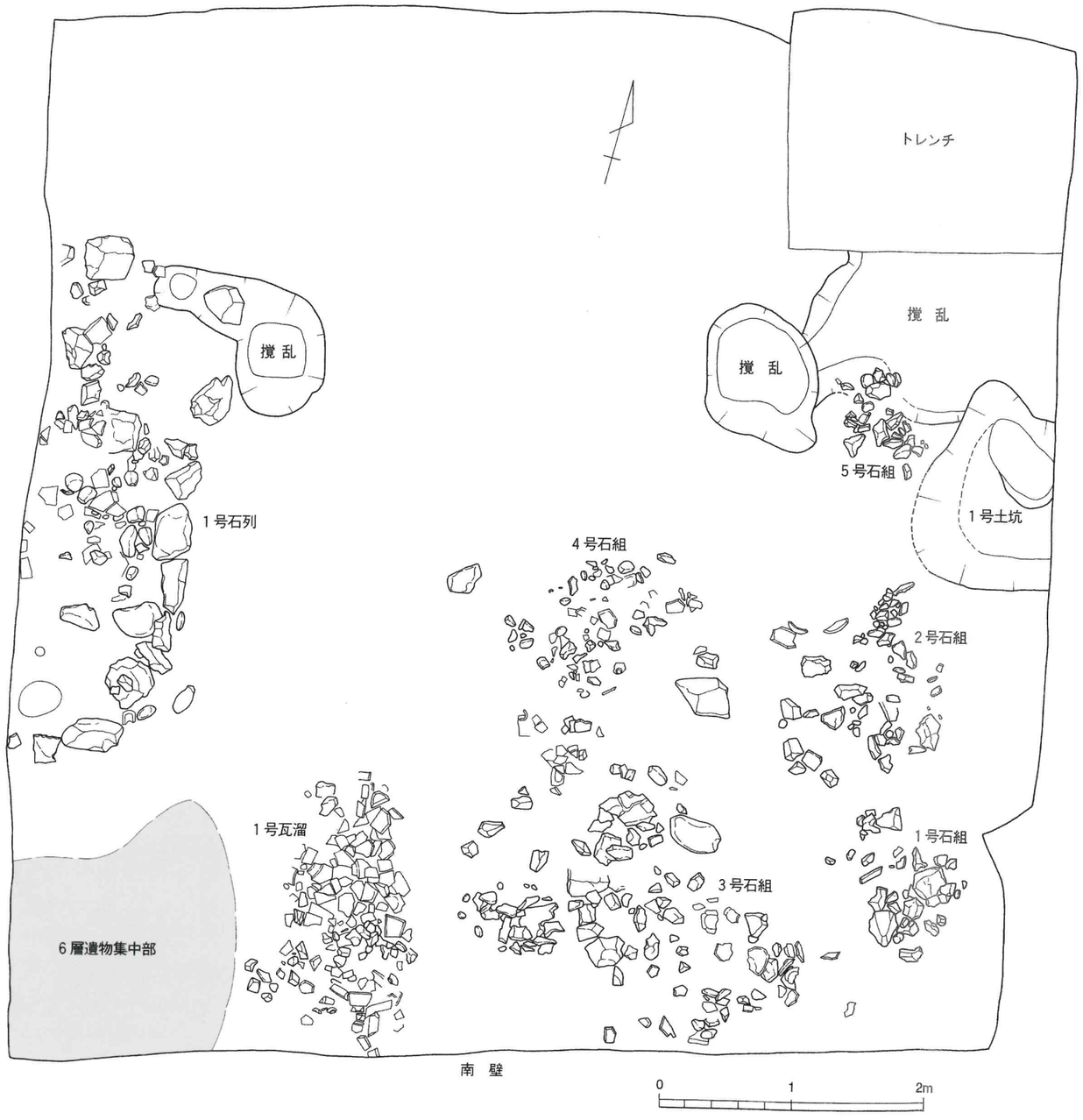


図6　B区遺構配置図（S＝1／40）

(5) 出土遺物

4層　図7－1・4は肥前染付磁器碗である。1は外面に牡丹唐草、内面に四方襷文をもち、18世紀前半～中頃に比定される。4は外面に若松文を描き、年代は18世紀中頃～後半である。2は透明釉の掛けられた関西産の陶器碗で18世紀後半以降の製品。本遺跡からは同タイプの碗がかなり出土している。3は産地不明のの陶器碗である。外面に白化粧土を掛けその上から呉須で竹を描いている。18世紀代の所産と推定される[(2)]。5は18世紀代の肥前白磁猪口。6～8は肥前染付磁器皿である。6は内面に草花文をもついわゆる初期伊万里の皿で、1630～40年代に比定される。7は内面菊花文、外面連続唐草文が描かれた18世紀後半のもの。8は18世紀前半の製品で同一形態、文様の皿が1号瓦溜から2個体分出土しており、組み物であった可能性がある。文様は内側面に窓絵花卉文、見込みに植物、外面に連続唐草となっており、本例では欠損しているが1号瓦溜出土例から「大明年製」銘をもつと推定できる。9は唐津系陶器二彩手皿。鉄釉と緑釉で内面に文様を描く。17世紀後半～18世紀前半の製品。10は肥前染付磁器水滴、18世紀後半以降の製品であろう。11は色絵磁器合子蓋で上面に「鹿・・」と書かれている。2文字目は下半部が欠失しているが「印」に似ていることから「鹿印」とも読め、薬または化粧品の商品名か製造元の名称の可能性がある。明治以降の瀬戸美濃産。12は堺産陶器擂鉢。見込みの擂目がウールマーク状になると考えられることから、18世紀後半に比定される。

5層　図8－1～4は肥前染付磁器碗である。1は山水文をもつ高台内無釉の碗で1640～50年代の製品である。2は薄手の丸碗で18世紀前半～中頃のもの、3は長崎の波佐見で大量生産されていたいわゆる「くらわんか手」といわれる18世紀代の雑器である。4は外面に竹文、見込みに五弁花を描く1780～1810年代のもの。5は唐津系陶器刷毛目碗で17世紀末～18世紀前半の所産である。6は関西産陶器筒形碗で、鉄釉で漢詩が書かれて

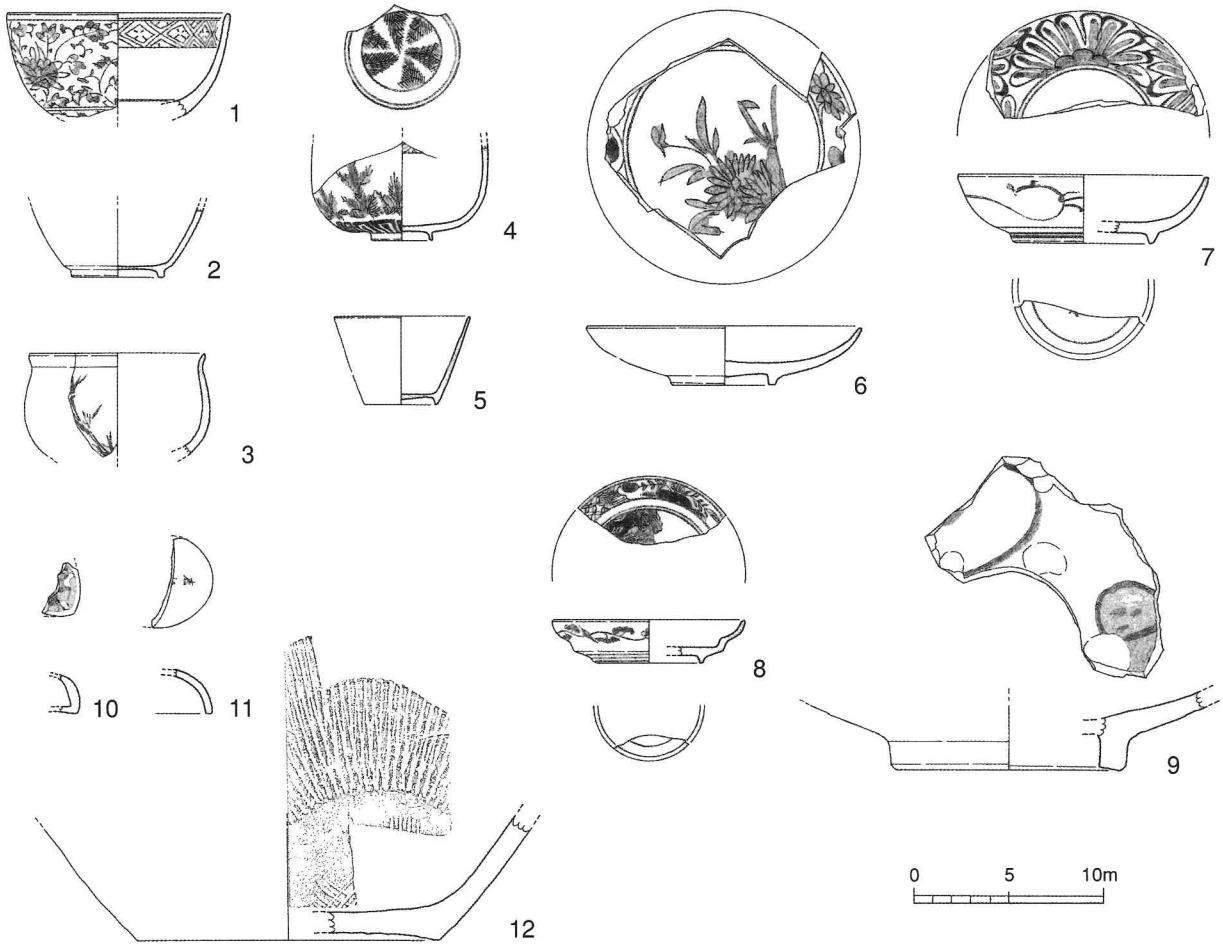


図7　B区4層出土遺物（S＝1／4）

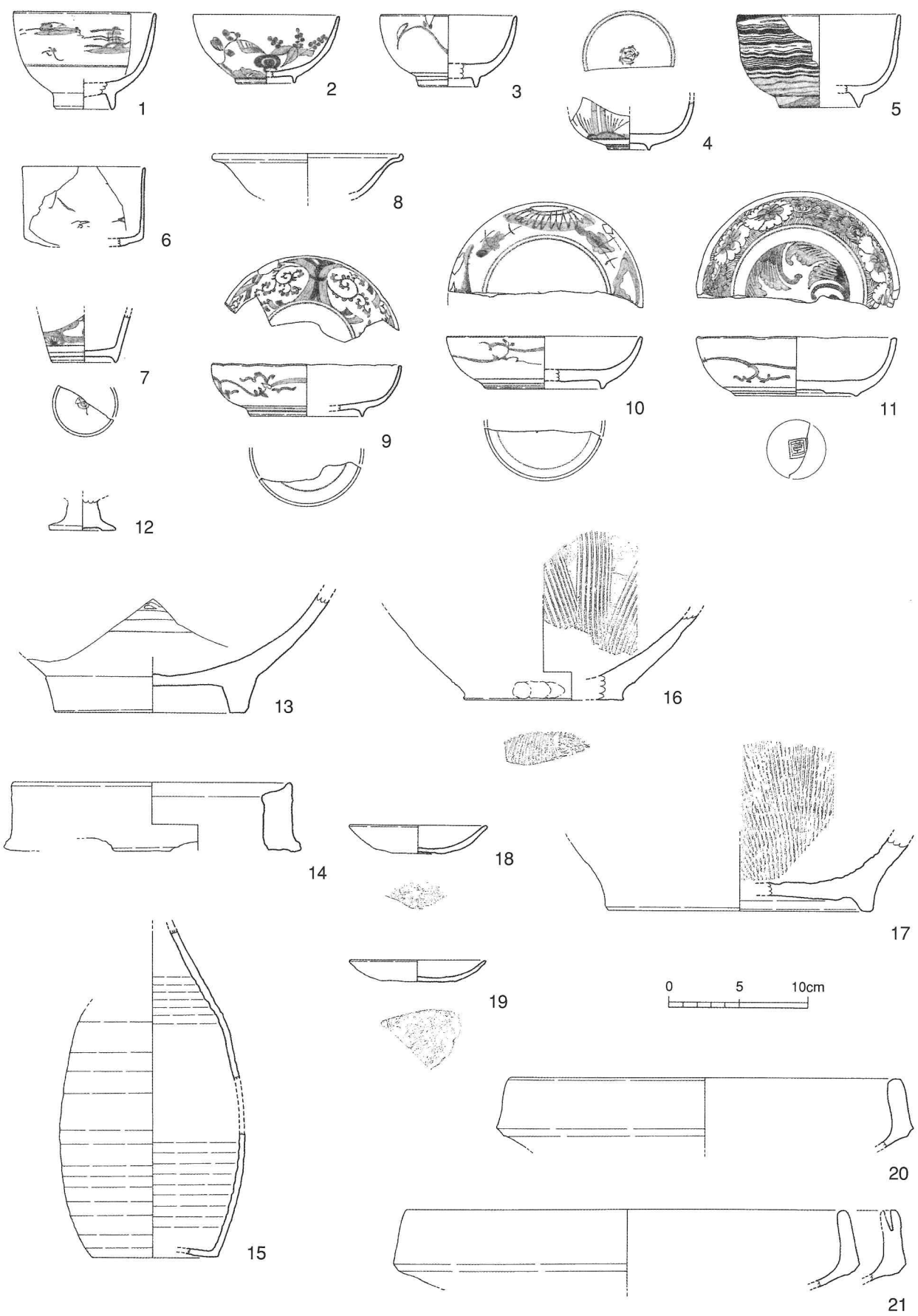


図8　B区5層出土遺物①（S＝1／4）

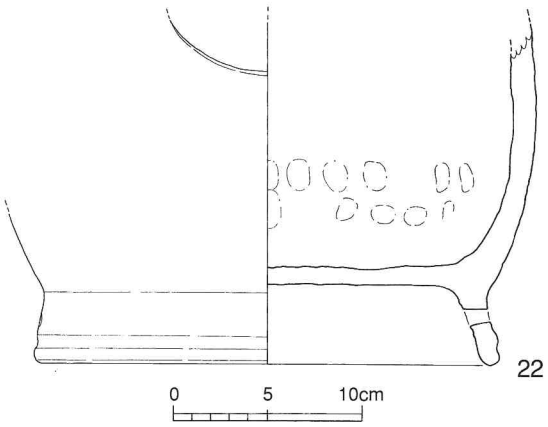


図９　Ｂ区５層出土遺物②（Ｓ＝1／4）

いる。18世紀前半～後半に比定される[3]。７は17世紀末～18世紀前半の肥前染付磁器猪口で、高台内に渦「福」字銘をもつ。８は唐津系陶器溝縁皿で1610～30年代の製品。９～11は肥前染付磁器皿で、９は内面に唐草と熨斗、外面に連続唐草を描く。同一形態、文様の皿が６層からも出土しており組み物であったと考えられる。年代は18世紀前半。10は内面に菊花、外面に連続唐草文をもつ18世紀前半～中頃の製品である。11は蛇ノ目凹形高台で、内面に渦花、見込みに波を描き高台内に「筒江」銘をもつ。青色がやや明るく発色する呉須を用いたもので、18世紀後半に比定される。石組遺構から同一形態、文様のものが出土しており組み物であったと推定できる。12は18世紀代の肥前磁器仏飯器である。13は唐津系陶器刷毛目鉢で見込みに重ね積みのための砂を円形に置く。年代は17世紀後半～18世紀前半。14は器種、年代共不明な焼き締め陶器である。上部は何かの受部のような形態で足をもつ。色調などから備前系の製品である可能性もある。15は備前系陶器瓶で外面に鉄泥を掛ける。18世紀代のものと考えられる。16・17は陶器擂鉢で前者は唐津、後者は堺産である。唐津産の方は擂目の間隔が広く糸切り離しのままの平底で、1600～50年代の所産である。堺産の年代は18世紀前半～中頃である。18・19は底部回転糸切りの土師質土器小皿である。19は右回転糸切り離しで、口縁部にススが付着していることから灯明皿として使用されていたことがうかがわれる。20・21は土師質土器焙烙で、21は口縁端部に１カ所把手が変化した貫通しない孔をもつ。これは完全な形であれば向かい合う２カ所にあるものである。図９－22は土師質土器焜炉で正面に火窓、高台部分の向かい合う２カ所に孔をもつ。体部内面には指オサエの跡が顕著に残る。関連資料として、大分市の府内城三ノ丸遺跡で19世紀前半～中頃に位置付けられるＳＫ33・ＳＫ34から同形態の瓦質土器が出土している。土師質土器の例としては関西で同様のものが確認されており、18世紀後半に比定されている[4]。18～22の土師質土器についてはいずれも在地産の可能性が高い。

６層　６層出土遺物については南西角遺物集中部とトレンチ内出土のものに分けて記述する。

①遺物集中部　図10－１は18世紀後半～19世紀初頭の肥前染付磁器筒形碗。２は関西産、３は瀬戸美濃産の陶器碗である。前者は色絵で松文が描かれており、後者は鉄釉が掛けられている。いずれも18世紀代の製品である。４は肥前染付磁器小杯で外面に花散らし、氷裂地文を描く。18世紀代のものである。５は18世紀後半～19世紀前半の肥前染付磁器紅皿。６は肥前染付磁器皿で、５層から同じものが出土している。５層出土のものでは欠損していたが、見込みに五弁花、高台内に渦「福」銘をもち、18世紀前半の所産である。７は肥前青磁火入れで18世紀中頃～末の製品である。８は関西産の陶器土瓶で外面に鉄絵で植物の文様を描く。口縁部と体部は接合しないが同一個体と思われる。18世紀後半以降のものである。９は唐草文の肥前染付磁器瓶で、18世紀代のものである。10・11は堺産陶器擂鉢で前者が18世紀前半～中頃、後者が18世紀後半に比定される。11の内底部には焼き台の痕跡がみられる。12・13は右回転糸切りの土師質土器小皿、14は５層出土のものと同形態になるとみられる土師質土器焜炉である。14の風通し孔は本来７個あったものと推定される。15は土師質土器焙烙で口縁端部に１カ所把手が変化した貫通しない孔がある。土師質土器は在地産と考えられる。

②トレンチ内　図11－１は18世紀末～19世紀前半の肥前染付磁器蓋。外面に山水文を描く。８は蛇ノ目凹形高台で内面に蛸唐草、見込みに十字花を描く。18世紀末～19世紀前半に比定される。３は土師質土器焙烙である。

図10　B区6層遺物集中部出土遺物（S＝1／4）

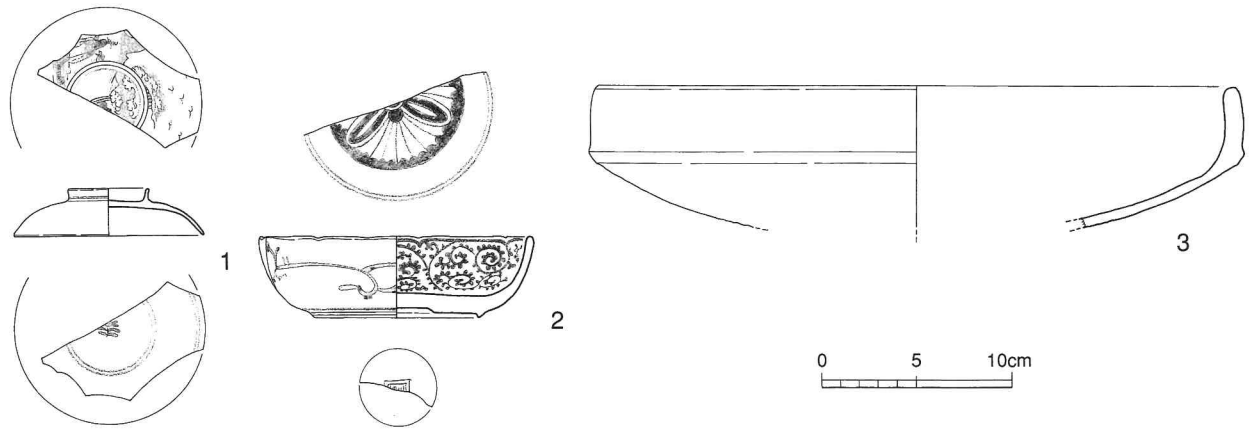


図11　トレンチ内6層出土遺物（S＝1／4）

石組　図12－1・2は肥前染付磁器碗で、1は外面に亀甲文と草花文、2は内外面に雲竜文を描く。1の年代は18世紀前半～中頃、2は18世紀後半である。3は18世紀代の関西系陶器碗。4は肥前色絵磁器小杯で外面に海老が描かれている。18世紀代の製品である。5～9は肥前産の磁器皿で、5～8は染付、9は青磁染付で装飾されている。5は内面に牡丹唐草、見込みに梅、高台内に渦「福」銘をもつ。年代は18世紀前半。6は内面に竹、見込みにコンニャク印判で五弁花、高台内に崩れた渦福を描く。18世紀後半のものである。7は5層から同じ形態、文様のものが出土している。18世紀後半に比定される。8は内面に蛸唐草、見込みに雲竜文をもつ大皿である。高台内の銘は「成」1字が残っており「大明成化年製」と推定される。9は肥前青磁染付大皿で見込みに若松と波が描かれ、高台内には「大明成化年製」銘をもつ。8・9は18世紀中頃～後半の製品で、ハリ支えの痕跡がみられる。10は蛇ノ目凹形高台の肥前青磁染付鉢である。内面に窓絵宝文、見込みに蝶を描き、「筒江」銘をもつ。年代は18世紀後半に比定される。図13－11・12は関西産陶器土瓶の蓋と身でセットであると考えられるものである。身には鉄絵が描かれ、ツルを取り付ける部分がナス形になっている。底部近くの露胎の部分に墨書があり「ケメケ」、「チメケ」あるいは「チはら」、「千右衛門」など読み方に数種類の可能性があるが、欠損のため全体については不明である。13は18世紀前半の肥前染付磁器深鉢と推定できるものである。外面に描かれた文様は仏手柑である[5]。特殊なものであるためこの資料についてはⅢのまとめで詳しく後述する。14は18世紀代の備前系水指と考えられる。14の把手は12の土瓶同様ナス形である。15は備前系瓶の底部で18世紀以降と推定される。16～18は堺陶器擂鉢である。16の口縁部内面には扇形の中に「上」の文字の入った刻印が押されている。16は17世紀末～18世紀前半、17・18は18世紀後半に比定される。19は在地産の土師質土器焙烙である。

1号石列　石列出土遺物のうち図化できたのは1点のみであった。図14－1は関西産陶器碗で外面に鉄絵で松文が描かれている。18世紀前半～後半の製品である。

1号瓦溜　図15－1～3は陶器碗で、1は17世紀後半～18世紀前半の肥前京焼風陶器、2・3は18世紀前半～後半の関西産である。3は透明釉を掛けた無文の碗で高台内に「京暁山」の刻印をもつ[6]。4は肥前染付磁器碗蓋で外面に唐草文、見込みに雨竜文を描き、銘は「筒江」である。18世紀後半のもの。5は瀬戸美濃産陶器鉢で見込みに目跡が残る。18世紀後半以降の製品と考えられる。6～8は肥前染付磁器皿である。6は本遺構から2個体分の破片が出土しておりその内の1点を図化したものである。残存部分から銘は「大明年製」と推定できる。7・8は内外面の文様は異なるが、ともに蛇ノ目凹形高台で見込み五弁花の、法量もほぼ同じ小皿である。18世紀後半に比定される。9は18世紀代の肥前染付磁器瓶底部である。10は肥前染付磁器で灰落しと考えられるものである。年代は18世紀代であろう。11は陶器土瓶で外面に鉄絵で笹文を描く。18世紀後半以降の製品で肥前産と推定される。12は土師質土器の擂鉢。底部は右回転糸切り離しの平底で擂目は密である。灯明皿や焙烙など他の土師質土器製品とは明らかに胎土が異なるため、搬入品である可能性が高い。13・14は土師質土器小皿で前者は左回転、後者は右回転の底部回転糸切りである。左回転の土師質土器小皿は、17世紀中頃以降の江戸でみられるものであり[7]、同じ豊後である大分市の府内城下町の調査では、これまでのところ認められていない[8]。ただし佐伯市内では同じ城下町遺跡の天祐館跡から、糸切りではないものの回転の方向が左となる土師質土器小皿が3点出土している[9]。15・16は土師質土器焙烙である。15は細片であったため口径等不明であるが、1カ所口縁部端部に貫通しない孔をもつ。16は口縁部を除いてほぼ完形復元できた例であり、貫通しない孔をもつ把手を有する。17～19は軒丸瓦で瓦当文様は順に九曜文、鷹の羽文、巴文である。九曜文の軒丸瓦は他に2点確認されている。これらの九曜文はいわゆる「離れ九曜」と呼ばれる細川家の家紋に似たものである[10]。20・21は軒平瓦で、前者は珠文が、後者は均整唐草文の端の方と推定される部分が残存している。しかしいずれも一部であるため瓦当文様の全体像は判然としない。

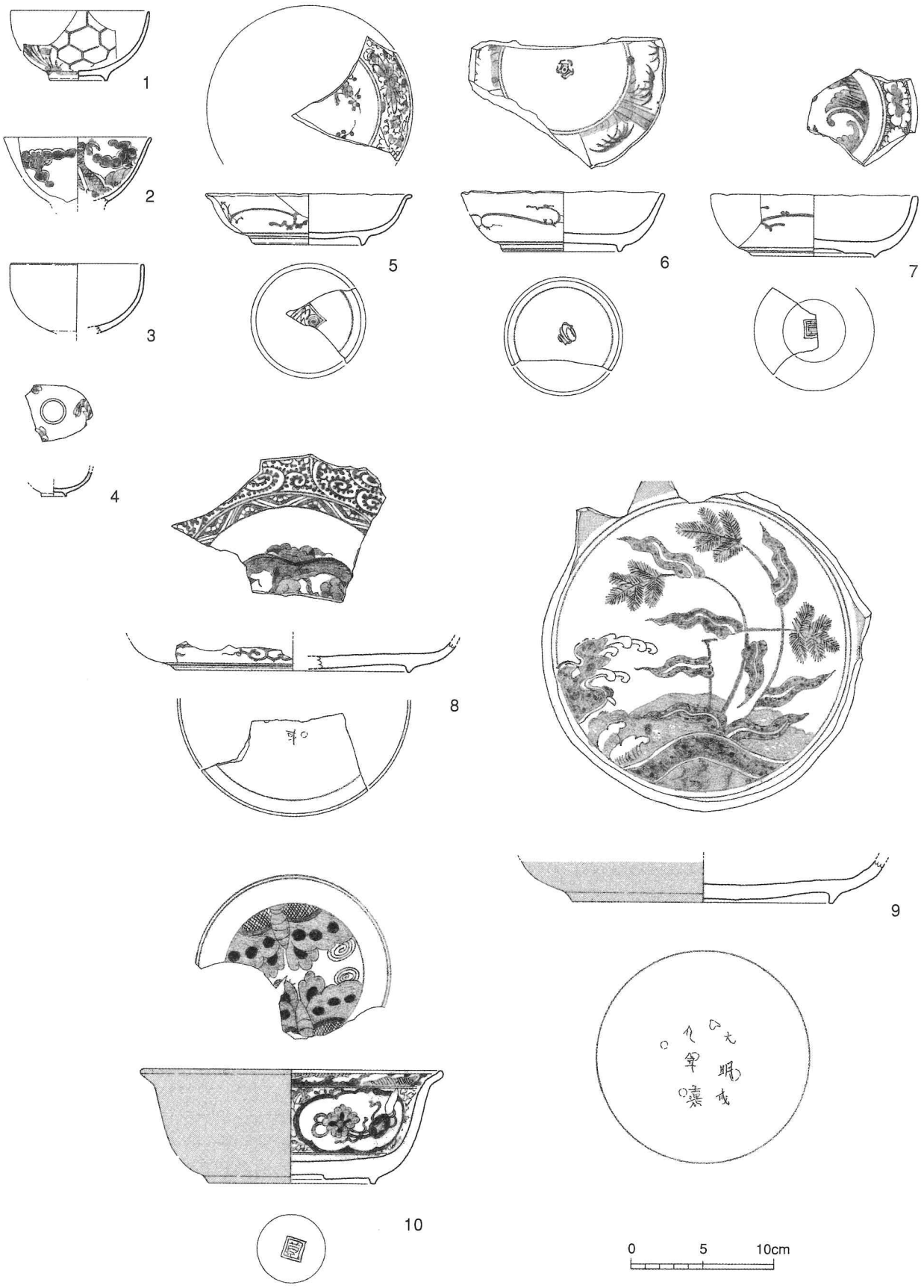


図12　B区石組出土遺物①（S＝1／4）

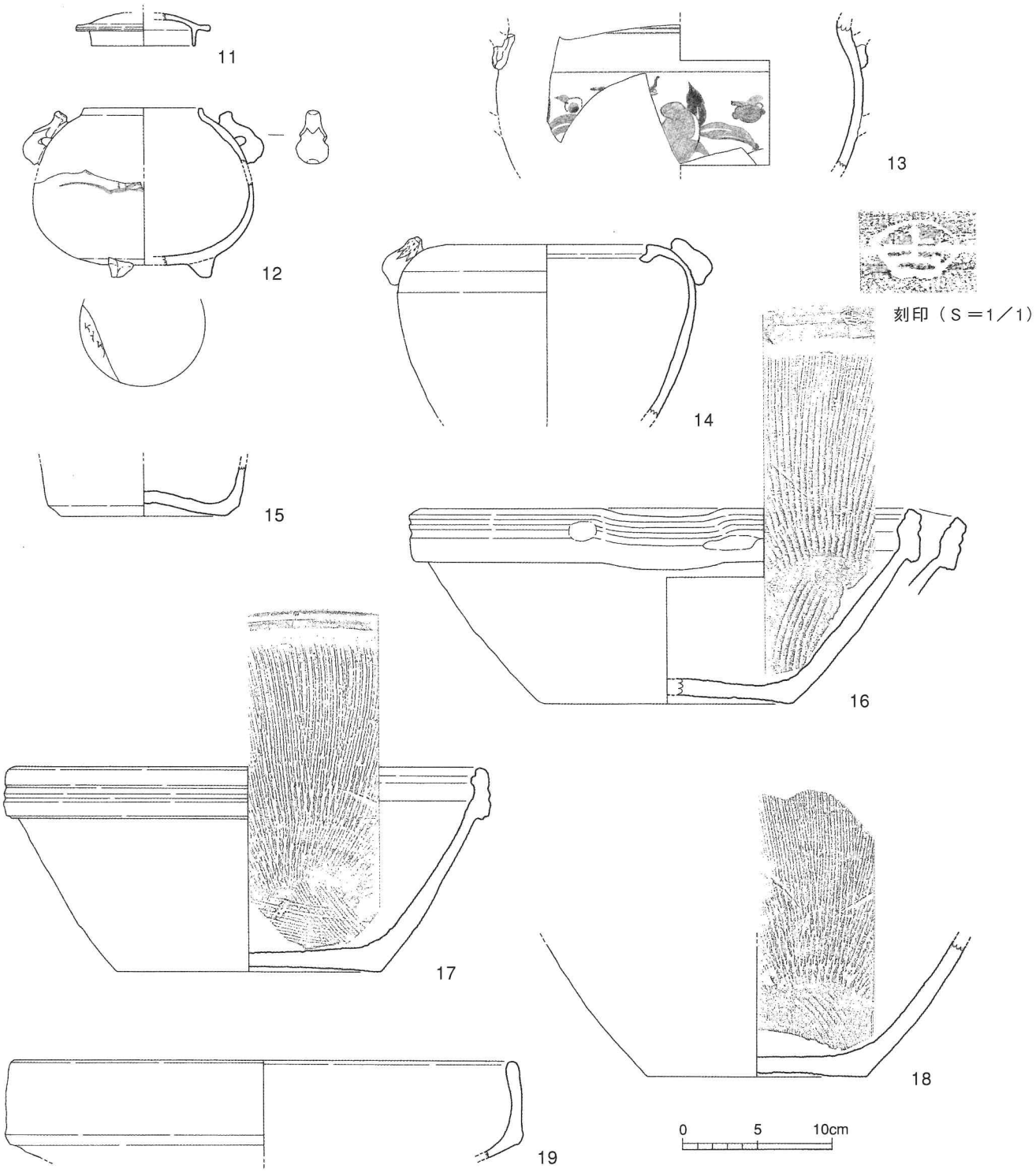


図13　B区石組出土遺物②（S＝1／4）

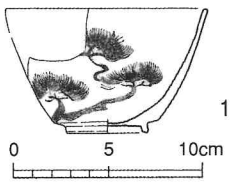


図14　1号石列出土遺物（S＝1／4）

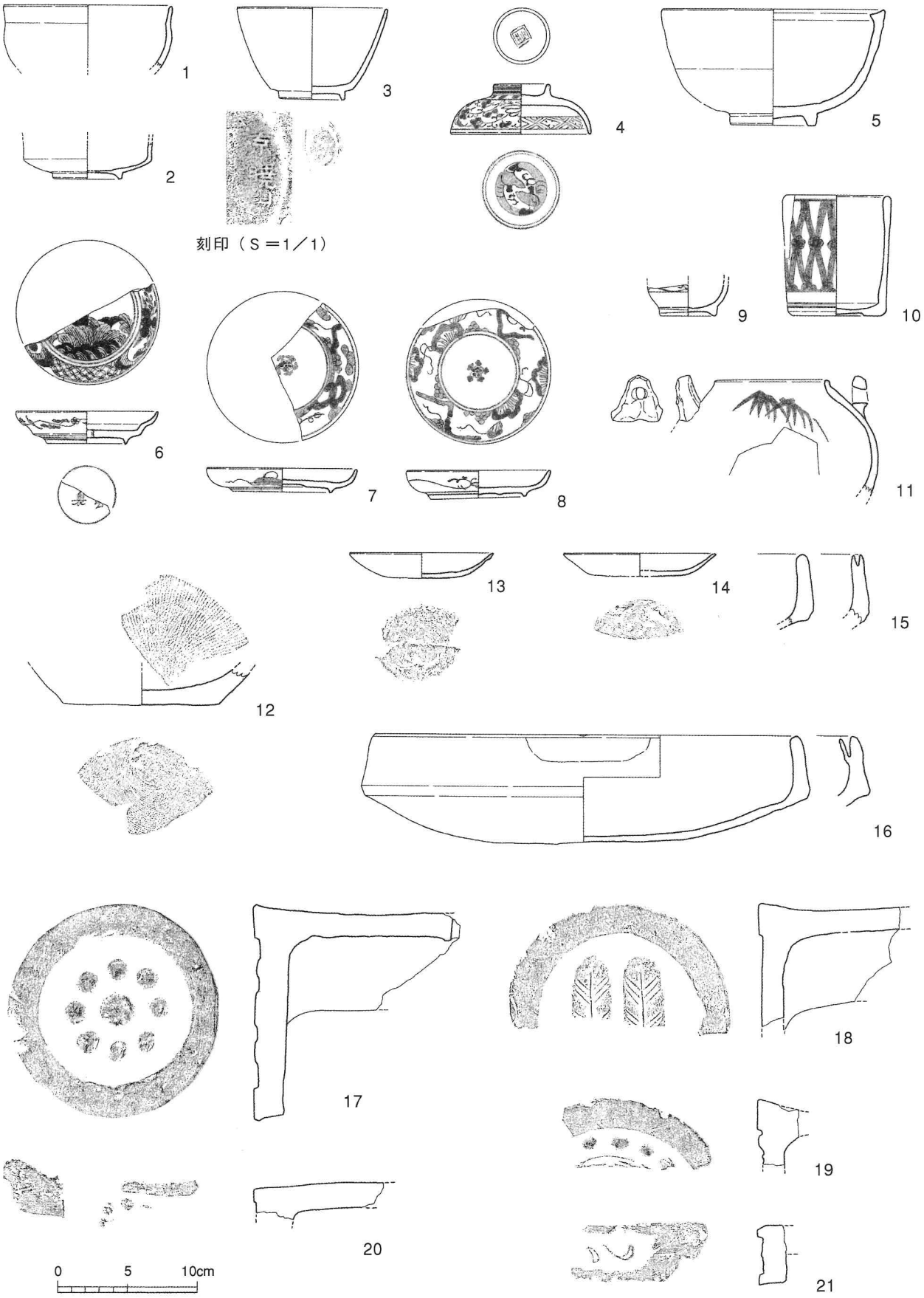


図15　B区1号瓦溜出土遺物（S＝1／4）

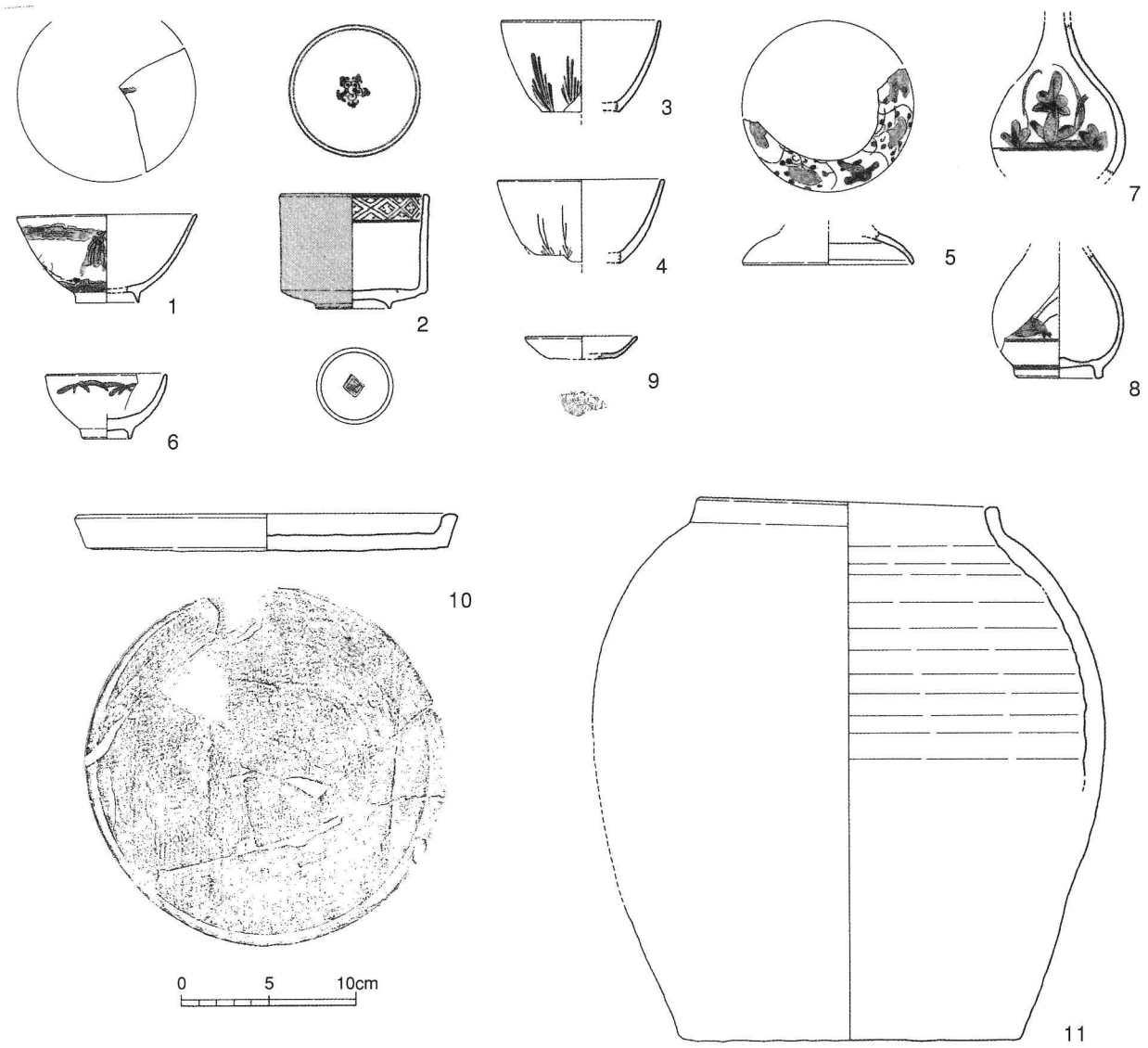


図16　B区１号土坑出土遺物（S＝1／4）

１号土坑　図16－１・２は肥前磁器碗である。１は染付で山、柳、動物を描き、２は青磁染付で見込み五弁花、「筒江」崩しと思われる銘をもつ。年代は順に19世紀前半代、1780～1810年代である。３・４は「若松碗」または「小杉碗」といわれるタイプの陶器碗である。外面に鉄で簡略化した根引き松を描く。関西産で18世紀末～19世紀前半の製品。５は肥前染付磁器蓋。1780～1810年代に否定されるいわゆる「広東碗」に伴うもので、仙芝祝寿文をもつ。６は18世紀後半～19世紀前半の肥前染付磁器紅皿である。７・８は肥前染付磁器瓶でいずれも18世紀後半～19世紀中頃に比定される。７は若松文が描かれている。９～11は土師質土器で、９は底部回転糸切りの小皿、10は盤または蓋、11は大形の壷である。10・11の底部には板状圧痕がみられる。10が蓋であるとすると11とセットになることも考えられる。９～11はいずれも精選された良質の胎土を使用しており、焼成の状態も非常に良いものであることなどから同一産地で生産されたものである可能性を指摘しておきたい。また在地産とした他の土師質土器とは胎土が異なる。

銅　銭

図17－1～3は調査区南西隅の6層遺物集中部からの出土で、いすれも摩滅が著しく文字の判読が非常に困難なものであった。1は「元豊通寶」の行書体と推定されるものである。北栄時代の中国で造られたもので、初鋳は1078年（元豊元年）である。2・3は「寛永通寶」であるが文字がほとんど見えないので古寛永か新寛永か不明である[11]。

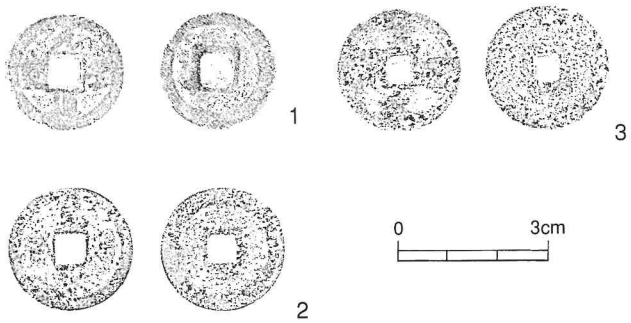


図17　B区出土銅銭（S＝2／3）

金属製品・木製品

図18－1～11はいずれも銅製品である。1・2は順に煙管雁首、吸い口である。1は断面六角形を呈し脂返しが明確ではないタイプで、2は内部に羅宇の一部が残る。3は刀の鍔の前後に取り付ける切羽で、4は鞘口金物と推定される。いずれも小刀用。5は用途不明の銅製品であるがやはり刀装具の1つと考えたい。6は刀の柄に付ける目貫と呼ばれる飾り金具で、笹をかたどったものである。7はかんざしである。8は唐草と魚子の両側に雷文が毛彫りされた飾り金具で、両端に孔がある。縁が裏側に折り曲げられていることから、孔に留め金様のものを差し込んで何かに被せるように取り付けたものと考えられる[12]。9は上部につまみのある蓋である。仏具であろうか。10は管状のものを湾曲させたもので何かの把手ともみえるが、用途は不明である。11は籠のようなものが潰れたものである。網目の部分は細い銅線をより合わせて目の形が六角形になるよう編まれており、両端が何かに掛けられるように折り返された把手様のものを2本もつ。網行燈あるいは手雪洞の類いであろうか[13]。12は箸の先端と考えられる木製品である。断面は四角形を呈する。

以上の銅製品、木製品は6が撹乱層からの出土である以外は南西隅6層遺物集中部からの出土であり、いずれも近世の製品であると考えられる。この他に鉄製品としては5層、石組、1号瓦溜から角釘が多数出土しているが今回は図化していない。その他の鉄製品については、錆が激しく原形の分かるものがはとんど確認できなかったため実測図は掲載しなかった。

註1　大分県教育委員会の高橋信武氏に情報をいただいた。
　東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅰ』1997
　新宿区遺跡調査会『百人町三丁目遺跡Ⅲ』1996
2　佐賀県教育委員会の大橋康二氏に実物を見ていただいたところ、年代は18世紀代で九州産の可能性が高いが産地は特定できないとのことであった。
3　鈴木裕子　「京焼出土資料の変遷」『'99徳島城下町研究会発表要旨　京焼－消費地出土の様相－』1999　関西近世考古学研究会・考古フォーラムとくしま
4　積山　洋　「大阪の土師質土器」『関西近世考古学研究Ⅳ』1999　関西近世考古学研究会
5　大橋康二　「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』1990　佐賀県立九州陶磁文化館
　細かい年代については、大橋康二氏にご教示いただいた。
6　大分県教育委員会の吉田寛氏に情報をいただいた。「京暁山」銘をもつ類例が東京都の尾張藩上屋敷跡遺跡から出土しているということである。
　東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』1998
7　小川　望　「江戸遺跡出土土器の諸様相」『関西近世考古学研究』1999　関西近世考古学研究会
8　吉田　寛　『府内城三ノ丸遺跡』1993　大分県教育委員会
　吉田　寛　『府内城下町遺跡』1999　大分県教育委員会
9　吉武牧子　『天祐館遺跡』1998　佐伯市教育委員会
10　丹羽基二・樋口清之　『家紋大図鑑』1971　秋田書店
11　後藤幹彦　「山上寺跡出土の中世遺物について出土銭貨」『栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』1994　佐伯市教育委員会
12　類例が尾張藩上屋敷跡遺跡から出土している。
　東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』1998
13　笹間良彦　『資料日本歴史図録』1992　柏書房

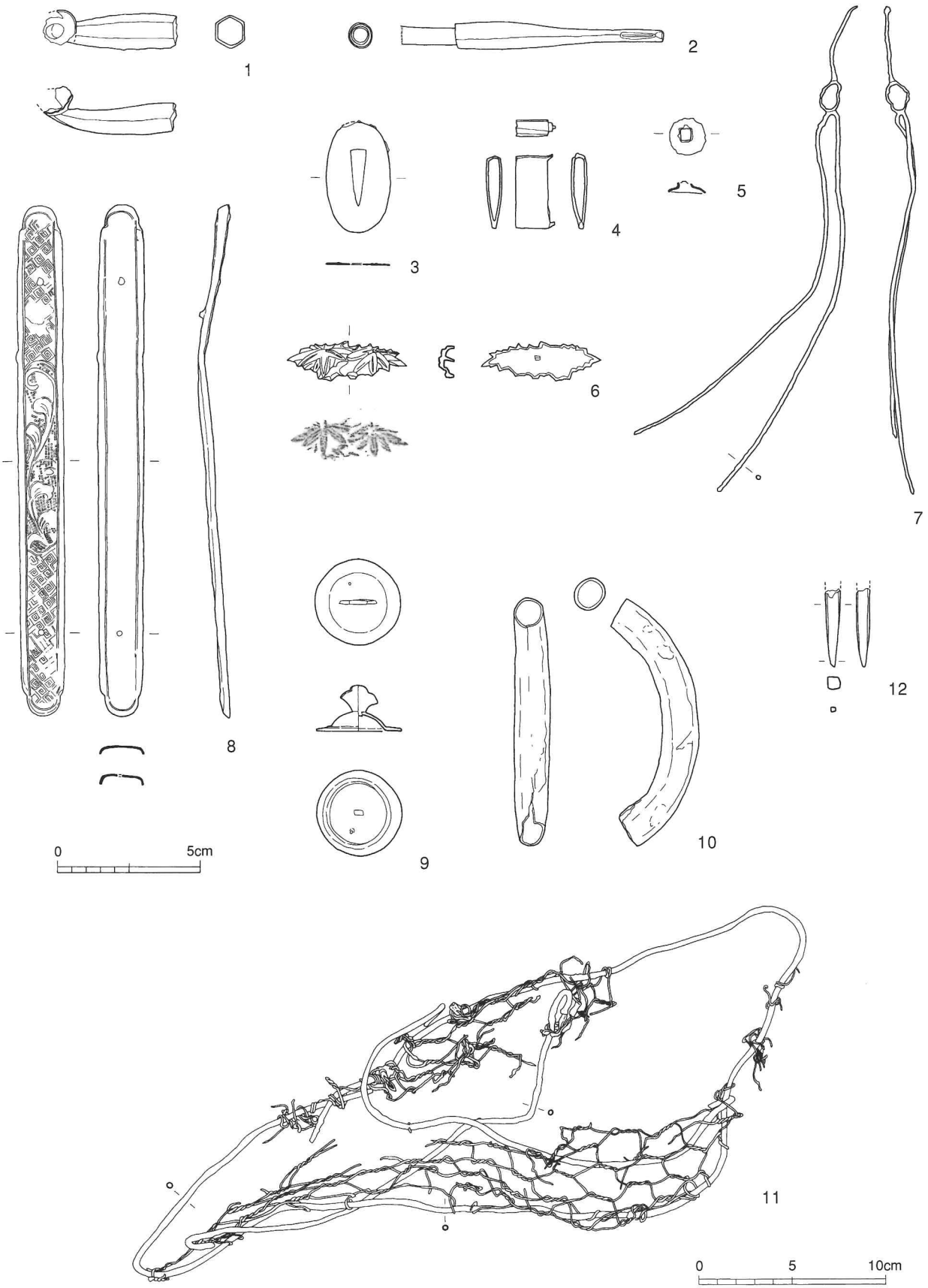


図18　B区出土金属製品・木製品（1～10・12はS＝1／2、11はS＝1／3）
1～5・7～12は6層遺物集中部、6は撹乱層から出土

Ⅲ．まとめ

今回の遺跡は工事日程の関係で２回に分けて調査を行い、最初の地点をＡ区、次をＢ区として報告を行った。

Ａ区は面積が約21m²と狭小でしかも西側が撹乱により破壊されていたため、遺構検出部分は極めて狭い範囲に留まった。遺構は地表下30cmと比較的浅いところで出土した石列３基とそれに伴う埋甕である。石列遺構は建物礎石、埋甕は出土状況から便所跡と推定した。遺構検出層は18世紀後半～明治期までの遺物を含んでいる。このことからこの層が近代以降の整地層であると想定され、遺構の年代は明治期を溯ることはないと考えられる。Ａ区については明治期整地層の下層から遺構は出土しなかった。

Ｂ区はＡ区から４ｍほど北に離れた地点に設定した面積約59m²の調査区である。18世紀後半の整地層である５層中から石組５基、瓦溜１基、廃棄土坑１基、５層上面からコの字状石列が出土した。年代決定に必要な遺物も各層ごとに比較的まとまって出土したため、４層が近代以降の整地層、５層が18世紀後半に造成された整地層であるとともに、５層上面が18世紀後半～19世紀中頃の生活面であったことが確認できた。石組は配置と構造から礎石下に埋設する根固め石である可能性が高く、５層造成後建てられた建物の基礎と考えられる。下層の６層は干潟であった層（砂層）なので地盤がゆるくこのような沈下対策が必要であったのであろう。同じ佐伯城下町遺跡内の天祐館跡でも同様の石組が多数出土しており、指図から南御殿（天祐館）の基礎であったことがわかっている。佐伯城下町は埋め立てによって築かれたため、建物の安全対策のためにこのような手厚い工事が施されたと考えられるが天祐館は藩主の別邸、本遺跡は上級武士の屋敷跡であり、下級武士の住居あるいは町屋など住む人間の身分の違いによって出土遺構に差があるのかも今後注意すべき点である。

ここでＢ区各層とＡ区との関連を考えると、Ａ区遺構検出レベルは４層上面とほぼ同じであり、出土遺物の年代も含めて４層整地以降に構築されたものであると推定できる。

調査地点は残存する絵図によると、元文３年（1738）から幕末まで上級武士である小林家の屋敷であった。調査の結果、この土地は18世紀後半に整地し直され新たに建物が建設されたことが確認されている。とするとこの整地は絵図が描かれた元文３年と文政９年の間に行われたことになる。そこで２枚の絵図を比較すると、文政絵図では元文絵図にはない道路が屋敷の南側に通され、しかも敷地内だったところに新たに５軒の住居が造られている（図19）。このように18世紀前半から19世紀に移行する間に、小林家の敷地は縮小され屋敷割が大きく変更されたことがうかがわれる。今回の調査結果は新旧の絵図に記された小林家敷地の変更が18世紀後半に行われた可能性を示唆するものとして注目される。では何故この時期にこのような土木工事が行われたのであろうか。記録によると寛政10年（1798）に大手付近から船頭町までの広範囲を消失する大火があり、この時に調査地点周辺も類焼した可能性がある[1]。５層が焼土や炭を多く含む部分をもつこと、遺物の年代も齟齬をきたすものではないことをその傍証と考えると、次のような仮説が立てられる。(1) 寛政10年の大火で調査地点を含む広い区域が消失した。(2) 藩は城下を再建するにあたって新たに整地を行い、何らかの理由で土地区画の変更を行った。ただし、出土遺物の中に２次的に被熱したものがほとんどない点に疑問が残るため現時点ではあくまで仮説の域を出ない。

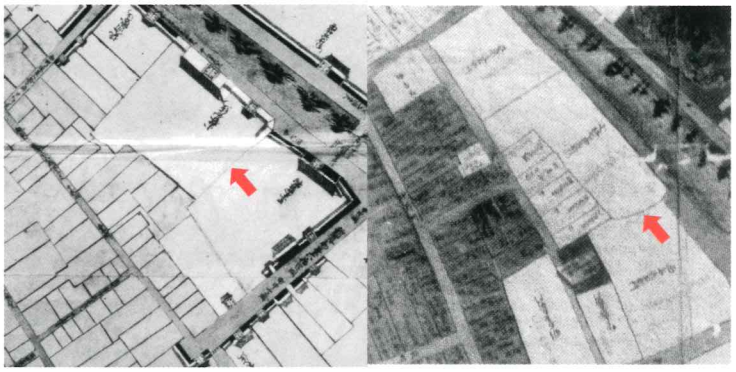


図19　元文３年絵図(左)と文政９年絵図(右)
（矢印で示した部分が小林家屋敷）

次に本遺跡出土遺物の中で特殊なものについて触れておきたい。Ｂ区石組出土の肥前染付磁器深鉢（図13－13）は本来輸出用に生産されていたものである。完形品は１ないし２個の把手が付き蓋をもつ。17世紀ものでは口縁部から胴部にまたがるように１個把手が付き、18世紀第２四半期から後半の粗製品には胴部に２個付くということである。外面には牡丹文と仏手柑文が染付され、身の口縁部内側には縁取りのように花唐草文を描く（図20）。

本遺跡出土の鉢は把手の位置は新しいタイプに近いが、文様は古いものに似ているため18世紀前半の年代が与えられた。本品の主要な輸出先はヨーロッパであったが、インドネシアのパサリカン遺跡、バンテン・ラマ遺跡からも出土しており東南アジアにも輸出されていたことが知られている。パサリカン遺跡はジャカルタの旧運河跡を発掘したもので、オランダ東インド会社に関係する多くの遺物が発見されその中に肥前磁器も含まれていた。バンテン・ラマ遺跡は16世紀後半～18世紀中頃にかけて栄えたバンテン王国の王都で、発掘調査によりかなりの量の肥前磁器が出土している。興味深いのはヨーロッパでのこの鉢の用途がトイレポットだったのに対し、インドネシアでは飯櫃として使用されたという説がある点である[2]。本遺跡出土のものがどちらの用途で使用されたのか、あるいはまったく別の用途に用いたのか、それ以上に何故このように特殊な製品が佐伯に持ち込まれたのか興味は尽きない。天祐館遺跡でも輸出向けに作られていた染付芙蓉手皿が数点出土しており[3]、磁器が徐々に普及する中で珍しいものを手に入れたいという需要が地方の城下町にもあったのであろうか。いずれにしても日本国内では磁器生産地の佐賀県と南蛮貿易の中心であった長崎以外での出土は珍しい例である。

図20　肥前染付磁器深鉢（バンテン・ラマ遺跡出土）
『海を渡った肥前のやきもの展』より転載

最後に本文では掲載しなかった撹乱層出土遺物の中の１点を紹介したい。図21は肥前青磁染付輪花皿である。上手の製品で見込みに濃く鮮やかな呉須で大輪の牡丹を描き、内、外の側面には青磁釉を掛ける。年代は18世紀前半～中頃のものである。注目されるのは高台内に「立林九良左エ門焼極上」という銘をもつことである。立林家は佐賀県有田町にある下南川原山の窯元である。下南川原山とは江戸時代の窯場の名称で現在の柿右衛門窯跡、南川原窯ノ辻窯跡がこれに当たる。この窯場は寛文ごろに鍋島藩の御道具山が置かれていたと推定されているところで、上手の製品を多く製作していた。「立林」という名は酒井田柿右衛門家に伝来する土型に残っており[4]、さらに『浄源寺過去帳』に記載されている下南川原山の人名の中に「小助親九郎左衛門」とある[5]。しかし過去帳の九郎左衛門が死亡したのは元禄７年（1694）であり皿の作られた年代より前であることから、過去帳の人物と銘の九郎左衛門とが同一人物であるのか不明である。本品の類例としては上南川原山の樋口３号窯第３期層（18世紀）から、牡丹の意匠がよく似た青磁染付皿が出土している。銘は「大明成化年製」である。

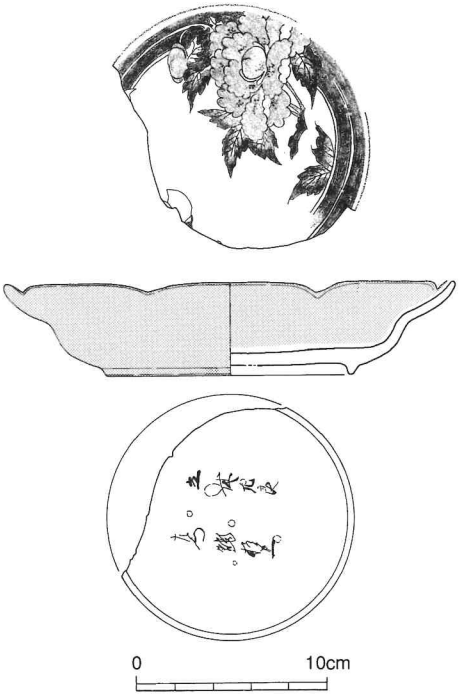


図21　Ｂ区撹乱層出土青磁染付皿（Ｓ＝1／4）

最後に本報告書を執筆するにあたり、大橋康二氏（佐賀県教育委員会）、高橋信武氏、吉田 寛氏（大分県教育委員会）にご教示いただきました。また遺物実測の一部については阿部みゆき氏（有限会社雅企画）にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

註１　佐伯市教育委員会『佐伯市史』1974
２　大橋康二氏にご教示いただいた。
大橋康二「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館　1990
３　佐伯市教育委員会『天祐館遺跡』1998
４　大橋康二氏にご教示いただいた。
佐賀県立九州陶磁文化館『柿衛門様式総合調査事業報告書』1999
５　有田町『有田町史　古窯編』1988

写真図版 1

A区全景

A区石列遺構

A区 3 号石列・埋甕

A区土瓶出土状態

B区全景

B区1・2号石組

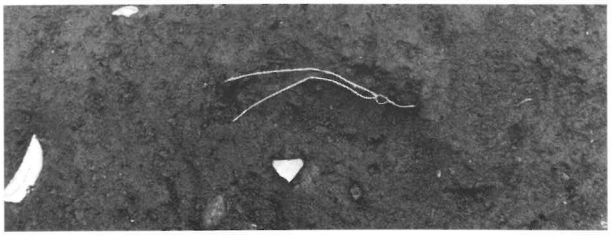
B区3号石組

B区4号石組

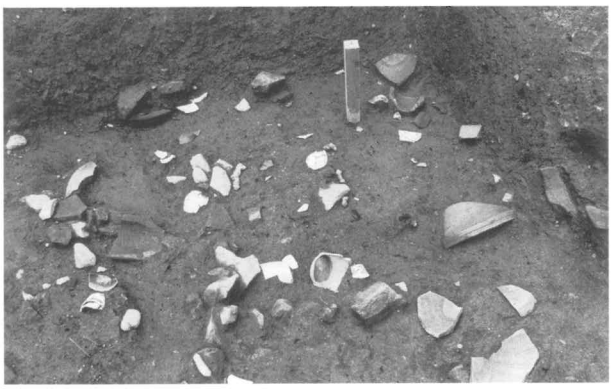
B区1号瓦溜

B区1号石列

B区1号土坑遺物出土状態



B区かんざし出土状態



B区6層遺物集中部

写真図版 3

A区出土遺物　1～6

B区 4 層出土遺物　1～12

B区 5 層出土遺物　1～11

5 層　13・16・17

5 層　14

5 層　15

B区 6 層出土遺物　1～9・1・2

B区石組出土遺物　1～8

石組　9・10

石組　13

石組　11・12・14・15

石組　16・17

16　上刻印

B区1号石列　1

B区1号瓦溜出土遺物　1～11

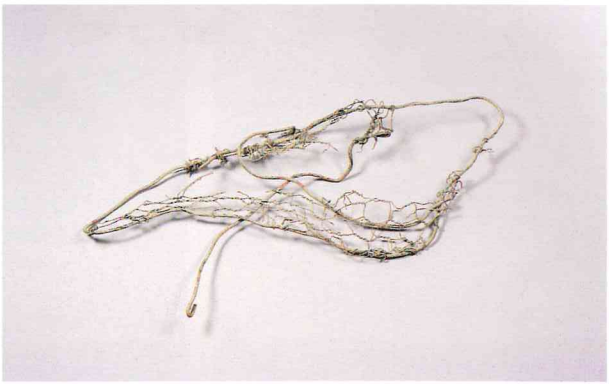
3「京暁山」刻印

1号瓦溜　12～16

B区1号土坑出土遺物　1～8

B区撹乱層出土青磁染付皿

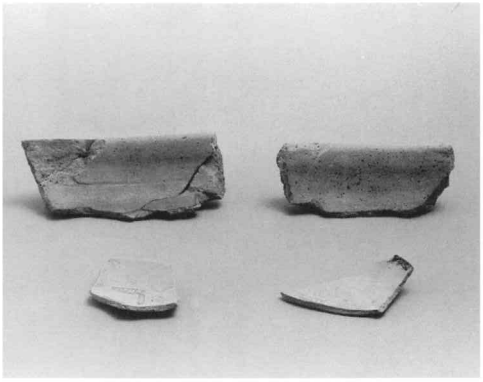
B区出土金属製品・木製品　1～10・12



金属製品　11

写真図版5

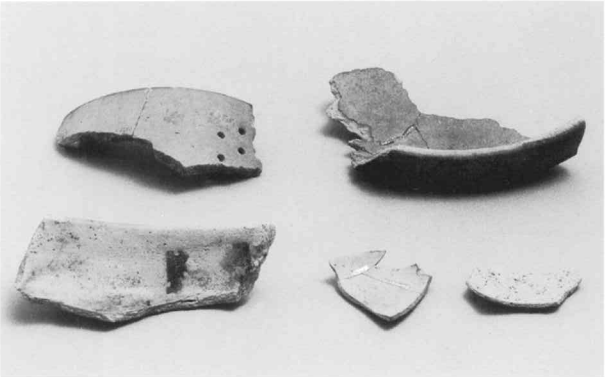
A区6「大學目藥」「參天堂藥房」



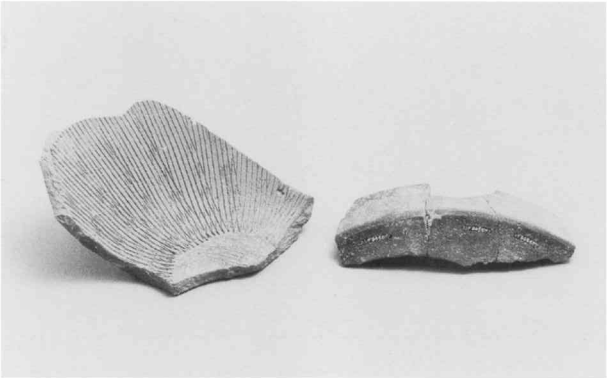
B区5層　18～21

5層　22

B区6層　10・11

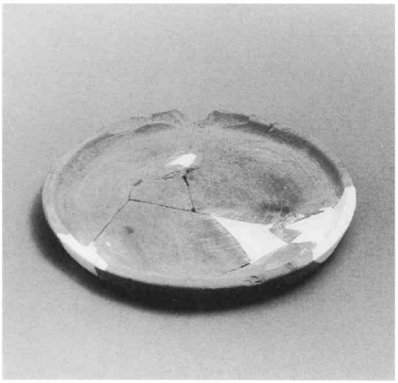


B区6層　12～15・3

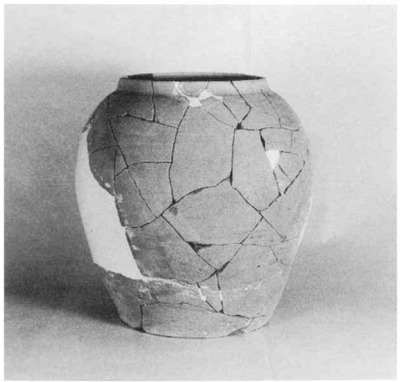


B区石組　18・19

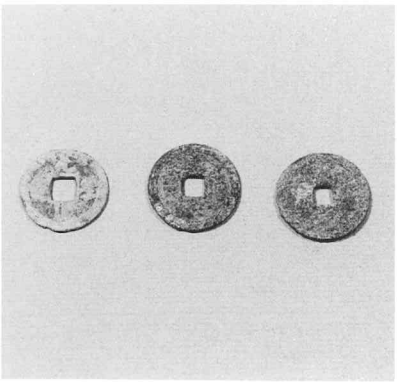
B区1号瓦溜　17～21



B区1号土坑　10



1号土坑　11



B区出土銅銭　1～3

報告書抄録

ふりがな 書名	さいきじょうかまちいせき　にしだびょういんちゅうしゃじょうちてん 佐伯城下町遺跡　西田病院駐車場地点
副書名	病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉武牧子
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-8585　大分県佐伯市中村南町4番1号
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町 にしだびょういん 西田病院 ちゅうしゃじょうちてん 駐車場地点	おおいたけん さいきし 大分県佐伯市 おおてまち 大手町3丁目 132番2	430	012			98.05.14 ～20 99.03.03 ～31	21.3m² 59.0m²	病院施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町 西田病院 駐車場地点	武家屋敷	近世	石組 石列 瓦溜 土坑	近世陶磁器・土器 瓦・金属製品 木製品 ガラス製品	撹乱部分から高台内に窯元の名を記して銘とした肥前産青磁染付皿出土。

病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

佐伯城下町遺跡

西田病院駐車場地点

2000年3月31日

発　行　佐伯市教育委員会
〒876-8585　大分県佐伯市中村南町４番１号
TEL　0972－22－3111

印　刷　(有)勉強堂美術精版社
〒876-0832　大分県佐伯市船頭町２番52号
TEL　0972－22－1324